

【研究ノート】

バイロン『ヘブライのうた』に関する研究ノート¹

A Research Note on Byron's "Hebrew Melodies"

藤井 仁奈

要旨：本稿では、バイロンによる『ヘブライのうた』Hebrew Melodiesについて、以下の順を追って述べる。

第一に、音楽家ネイサンによる〈ヘブライのうた〉出版の構想と、バイロンによる作品の執筆、その後の錯綜した出版の経緯について説明する。

第二に、『ヘブライのうた』が、出版当時、ユダヤの人々の持つ民族意識を鼓舞する機能を担ったかどうか、また、〈民族のうた〉(national melodies)の系譜に、『ヘブライのうた』が該当するかどうかについて検討する。

第三に、『ヘブライのうた』に含まれる古代イスラエルの物語について時代順にまとめる。また、それらを踏まえ、バイロンの〈バイロニック・ヒーロー〉像が、『ヘブライのうた』の中にも見出せることを確認する。

第四に、『ヘブライのうた』の、邦訳詩集での扱いについて、可能な限り詳細に分析し、考察する。

キーワード：バイロン Byron

ヘブライのうた Hebrew Melodies

民族のうた national melodies

バイロニック・ヒーロー Byronic Heroes

邦訳 translations in Japan

* ふじい にいな 文科大学文学部英米語英米文学科・非常勤講師

1 本稿中に用いる、『ヘブライのうた』Hebrew Melodies に収

録されている作品名の日本語訳(邦題)は、筆者以外の訳者の手による日本語訳(邦題)と明記されているものを除き、すべて筆者によるものである。

はじめに

『ヘブライのうた』*Hebrew Melodies* は、一八一五年に、ユダヤ人音楽家アイザック・ネイサン (Isaac Nathan, 1790-1864) による楽譜が付され、初めて出版された、バイロン (George Gordon Byron, 1788-1824) による一群の詩である。これらの大部分は、一八一四年の秋ごろから一八一五年の初春かけて書かれた。バイロンはこの時期、『ヘブライのうた』の執筆に集中して取り組んだと見られる。²

『貴公子ハロルドの巡礼』*Childe Harold's Pilgrimage* 第一——二編の出版により、時の寵児となったバイロンは、一方で数々のスキヤンダル的となった。その後、一八一五年一月、アナベラ・ミルバンク (Anne Isabella Milbanke, 1792-1860) と婚約、結婚。敬虔な彼女を喜ばせ、表敬するために、聖書に関する『ヘブライのうた』の執筆に没頭したと考えられる。³ 『ヘブライのうた』の清書原稿のうち、出版

元のマレー社に入稿するためのものは、アナベラの手によって作成されている。

この頃のネイサンはと言つと、『民族のうた』(national melodies) の流行にのって、伝統的でかつ現代的なユダヤ音楽を作曲し、野心的にも一獲千金を狙っていた。親からは、ユダヤの聖職に就くよう期待されていたものの、音楽の道を志し、ロンドン音楽会の大物ドメニコ・コッリ (Domenico Corri, 1746-1825) の下に弟子入りし、そこで、歌手のジョン・ブラハム (John Braham, 1774-1856) と知り合った。一八一二年には教え子と結婚している。

『ヘブライのうた』執筆と出版の経緯

一八一三年にはすでに、ネイサンの頭には、ユダヤの『民族のうた』出版の構想があり、彼はその構想を実現しようと思っていた。ユダヤ音楽の伝統に則りつつ、新たな知見を拓く、学術的価値のある出版物であ

² 東中稜代「バイロンの Hebrew Melodies における "ambivalence" について」『龍谷大学佛教文化研究所紀要』第二十二集、龍谷大学佛教文化研究所編、一九八三年、一一四頁。

³ Coleridge, Ernest Hartley, ed. *The Works of Lord Byron*, Poetry. Vol. III. New York: Octagon Books, 1966, 375.

ると同時に、金銭的な目標をも達成するような作品を
と考えていた。彼は、当時流行していた音楽に慣れ親
しんだ作曲家であったが、同時にユダヤ音楽の真髄を
探求する研究者でもあった。だが、当時シナゴーグ
(ユダヤ教の会堂)⁴で演奏される音楽は、西洋音楽に大いに影響
を受けていた。したがって、ネイサンが『ヘブライの
うた』のために採用した旋律は、マソラ本文(六世紀に
と呼ばれる学者によって校訂されたヘブライ語旧約聖書で、注釈・注釈がついている)に合わせて歌われる伝統的音
楽のものと、聖書の内容ではない歌に付けられている、
より自由度の高いものの両方であり、とくに後者を中
心としている。⁴ただし、当時歌われていた音楽は、
各地のユダヤ共同体によってまちまちであり、彼の採
用した「伝統的音楽」が真髄であるかどうかの判断は
難しい。とにかく、結果として、当時シナゴーグで耳
にした音楽を中心に、同時に自分の作曲家としての才
能も発揮して、比較的自由に、ネイサンはバイロンの
書いた『ヘブライのうた』の詩に、音楽を付けたので
ある。

4 Burwick, Frederick and Douglas, Paul eds. *A Selection of Hebrew Melodies, Ancient and Modern*, by Isaac Nathan and

ネイサンは、『ヘブライのうた』の構想を実現する
ため、手始めに、当代随一の郷土詩人スコット (Walter
Scott, 1771-1832) に詩を書いてもらうよう依頼する
が断られた。その後、一八一四年六月、バイロンに作
詞を依頼する丁寧な手紙をしたためるが、これも断
られてしまった。しかし、ネイサンは諦めなかった。
バイロンの生涯の友人ダグラス・キナード (Douglas
Kinaird, 1788-1830) が、ユダヤ人歌手のブラハムに
好意を持っていることを利用し (またブラハムがネイ
サンとバイロンの共作に対する金銭的な興味を持って
いた)、キナードに仲介を依頼する。そして一八一四
年九月一日、この企画を提案するために、キナード
はバイロンに宛てて手紙を書く。

ところで、バイロンに対して歌詞を依頼してきたの
は、ネイサンが初めてではなかった。一七九三年に『ス
コットランド民謡選集』*Select Collection of Original
Scottish Airs* を出版したジョージ・トムソン (George
Thomson, 1757-1851) は、一八一二年七月、バイロン

Lord Byron. Tuscaloosa: University of Alabama Press, 1988.
11.

に作詞を依頼したが、断られた。これがネイサンには吉と出た。それまで歌詞をかくことに興味がなかったバイロンだが、トムソンの依頼の影響で、一八一三年には試作品も作ったようだ。〈民族のうた〉の流行、とくにムアの『アイルランドのうた』 *Irish Melodies* を、バイロンも充分に耳にしていた。結局、ネイサンが持ちかけた題材が、バイロンの好みに合う旧約聖書の内容であったこと、そして婚約者アナベラ⁵が敬虔深く、彼女の気を引くのにも好都合な題材であったことから、バイロンは一八一四年九月、『ヘブライのうた』を書くことに同意した。当初、ネイサンは、「ひとつかふたつの詩」を依頼したのだが、一年以内に二十九もの数の詩を手に入れることになった。⁶

5 一説に拠れば、アナベラは、ソツツイーニ派（字ハ十六世紀後半、イギリスの神と特にイスラームの神の教義を中心として進歩された宗教運動を云々）だった (Cochran, 2011, 23)。年代を追って考えると、ソツツイーニ派の影響下に、ユニテリアン（プロテスタントの一派で、正統派の三位一体に反し、対し神の単性を主張し、イエスの神性を否定する）が興ったのであり、ソツツイーニ派はユニテリアンの原型と言えよう。ユダヤ教の考え方から見ると、ユニテリアンは「倫理的・一神教の集団」であり、ユダヤ教と似通っていて、「掘り下げたところまで」は申し分ない」(スタインバーク、一六六)。つまり、ユニテ

出版の経緯は錯綜している。当初、ネイサンは独占的な版權を求めていたが、それはかなわず、それまで継続的にバイロンの詩を出版してきたマレー社との出版競争のような様相を呈することとなった(図1参照)。

ネイサンは、「マゲダラのマリア」 *Magdalen* と「ベルシャツアルへ」 *To Bethshazur* を除き、一八一五年から二九年の間に、自身で音楽をつけて、様々な歌の改版を刊行した。さらに、版を重ねるうちに、旋律においてバリエーションを持つ作品も生まれた。ネイサンによって出版された楽譜付きの『ヘブライのうた』は、マレー社によるバイロンの本文のみの出版物よりも、ずいぶん多く売れたとされ

リアンとユダヤには通底するところがあると考えられる。なお、バイロンとアナベラは、一八一二年三月に初めて出会って以来、一八一四年九月の婚約に至るまで、文通相手として交流を重ねており、その中には旧約に関わることは含まれている手紙も散見される。

6 Ashton, Thomas. *Byron's Hebrew Melodies*. London: Routledge & Kegan Paul, 1972. 9-30.

図1 マレーおよびネイサンによる『ヘブライのうた』の初期版5点における収録作品
(Cochran (2009) と Ashton (1972) に基づく)

	作品名	マレー版	ネイサン版		ネイサン版	マレー版
		1815	1815 4月	1815 11月	1827-29	1831
1	美をまとい、その女は歩む <i>She Walks in Beauty</i>	○	○	×	○	○
2	歌う大王が堅琴を奏でたのだ <i>The Harp the Monarch Minstrel Swept</i>	○	○	×	○	○
3	あの天上の世界が <i>If That High World</i>	○	○	×	○	○
4	野のかもしれない <i>The Wild Gazelle</i>	○	○	×	○	○
5	ああ、泣いてくれ <i>Oh! Weep for Those</i>	○	○	×	○	○
6	ヨルダン川の岸辺では <i>On Jordan's Banks</i>	○	○	×	○	○
7	エフタの娘 <i>Jephtha's Daughter</i>	○	○	×	○	○
8	ああ、花のさかりに死んだひとよ <i>Oh! Snatched Away in Beauty's Bloom</i>	○	○	×	○	○
9	我が心は暗い <i>My Soul Is Dark</i>	○	○	×	○	○
10	わたしはおまえが泣くのを見たよ <i>I Saw Thee Weep</i>	○	○	×	○	○
11	おまえは生涯を終え <i>Thy Days Are Done</i>	○	○	×	○	○
12	いまがそのとき <i>It is the Hour</i>	○	○	×	○	×
13	最後の戦いのまえの、サウルの歌 <i>Song of Saul Before His Last Battle</i>	○	×	○	○	○
14	サウル <i>Saul</i>	○	×	○	○	○
15	「すべてはむなしい、と伝道者は言う」 <i>'All is Vanity, Saith the Preacher'</i>	○	×	○	○	○
16	この苦しみ肉体が冷えきるとき <i>When Coldness Wraps This Suffering Clay</i>	○	×	○	○	○
17	ベルシャザルの幻視 <i>Vision of Belshazzar</i>	○	×	○	○	○
18	眠れぬ者の太陽よ <i>Sun of the Sleepless!</i>	○	×	○	○	○
19	私の信仰が偽りなら <i>Were My Bosom As False As Thou Deem'st It To Be</i>	○	×	○	○	○
20	マリヤムネを悼むヘロデの歎き <i>Herod's Lament for Mariamne</i>	○	×	○	○	○
21	ティトゥスがエルサレムを破壊した日に <i>On the Day of the Destruction of Jerusalem by Titus</i>	○	×	○	○	○
22	バビロンの水辺に座って <i>By the Rivers of Babylon We Sat Down and Wept</i>	○	×	○	○	○
23	センナケリブの破滅 <i>The Destruction of Sennacherib</i>	○	×	○	○	○
24	ヨブ記より <i>From Job</i>	○	×	×	○	○
25	[明るいといいな、おまえの魂の在処が] <i>[Bright Be the Place of Thy Soul]</i>	×	×	×	×	○
26	音楽のための詩（おまえの名前を） <i>Stanzas For Music (I Speak Not - I Trace Not - I Breathe Not)</i>	×	×	×	○	○
27	流れのほとりて <i>In the Valley of Waters</i>	×	×	×	○	×
28	〈待み〉があることは幸せだ <i>They Say That Hope Is Happiness</i>	×	×	×	○	×
29	ベルシャザルへ <i>To Belshazzar</i>	×	×	×	×	○
30	フランシスカ <i>Francisca</i>	×	×	○	○	×
31	マグダラのマリア <i>Magdalen</i>	×	×	×	×	×

ている。⁷ ネイサンの付した楽譜が、当時中産階級の女子のたしなみのひとつとして見られていた、ピアノによる伴奏を想定した歌という形態を採っていたことも重要だった。⁸ 当時の習慣、ユダヤの民族音楽由来する旋律、ブラハムによるコンサート会場での紹介、そしてバイロンによる聖書に対する深い理解のもとに編まれた詩が合わさって、『ヘブライのうた』の人気につながった。

一方、マレー社側も、バイロンの作品集の出版をもくろんでいた。ネイサンとともに、バイロンがマレー社から離れて出版活動を行い、彼の作品を世に出すことを、快く思っていなかった。マレーはなんとかバイロンの作品をこちら側に持つてこようと画策し、結果的に、バイロンによる本文のみを出版することに成功した。バイロンにとって、『ヘブライのうた』は、新

7 *Ibid.*, 48. アシュトンは、具体的には、ネイサンによる『ヘブライのうた選集』*A Selection of Hebrew Melodies*が、一万部（当時の金額で五千ポンド以上）を売り上げたとする説もあると言っている。また、マレー社版は、楽譜がついていない状態での出版だったが、六千部（当時の金額で八三六・五ポンドの利益）の売り上げだった。

たな作風の詩を書く機会を与えたのであり、その内容はバイロンの「放蕩生活からの」改心の一部を担い、その形式は、「物語詩を主として書いてきた」彼の経歴における刷新にあたる」ものだった（Mole, 107）。そして、マレーの出版した本文は、決定稿として理解されることになったのである。⁹

様々に思惑が錯綜して完成した『ヘブライのうた』は、二十世紀中葉の一九七二年、トマス・アシュトン（Thomas Ashton）による『バイロンの『ヘブライのうた』*Byron's Hebrew Melodies*」において、ほぼ「完全版」が編まれた。この書物には、出版までの経緯を含めた詳細な解説とともに、「マゲダラのマリヤ」を除く、全三十の詩が、楽譜なしで、掲載されている。

8 Benis, Toby R. "Byron's *Hebrew Melodies* and the *Musical Nation*," ed. Spector, Sheila A. *Romanticism/Judaica: A Convergence of Culture*. Surrey: Ashgate, 2011, 36.

9 Mole, Tom. "The handling of *Hebrew Melodies*," *Byron: Heritage and Legacy*, ed. Cheryl A. Wilson. New York: Palgrave Macmillan, 2008, 111.

〈民族のうた〉(national melodies)のなかで

くりかえしになるが、バイロンが『ヘブライのうた』を執筆したころ、イギリスでは、スコットランドやアイルランドなどの各地域では、地域の独自性を表現する固有のことばで書かれた詩に、曲をつけた作品が、数多く出版された。古くからのことばや旋律を受け継いでいくという意識が高まっていたのだ。これらは〈民族のうた〉(national melodies)と呼ばれ、当時、それぞれの土地に根づく民族の文化継承という意味で、ナショナルリズムの構築の一部を担っていた。

バイロンは、家系に縁のあるスコットランドの音楽に、自分の詩を付けないか、と、ジョージ・トムソンによつて依頼されたが、先行する作品を超えることは難しいと判断し、この依頼を断った。しかし、バイロンは旧約聖書の歴史に大いに興味関心があったので、それをテーマにした『ヘブライのうた』のネイサンの企画に、バイロンは承諾したのだった。

ただし、この『ヘブライのうた』は、他の〈民族のうた〉とは異なる性質を含有する。スコットランドやアイルランドに関係する〈民族のうた〉は、それぞれの土地固有の言語を用いて編まれている。また、大英帝国による同化・吸収への反発から、これらの〈うた〉がもてはやされた。『ヘブライのうた』は、言語と政治的反発心という点が、〈民族のうた〉と一致しない。¹⁰

バイロンが英語で書いた『ヘブライのうた』の詩には、ヘブライ語が用いられているのではないし、ユダヤの人々が、大英帝国に同化される反発を、この詩からくみ取ったわけでもない。

当時、イギリス国内における、中世に根をもつ反ユダヤの感情は、おどろおどろしい幻想とともに、十九世紀半ばになってもキリスト教徒知識人にも見られた。¹¹たとえば、バイロンの親友で政治家のホブハウス(John Cam Hobhouse, 1786-1869)は、ユダヤ人

¹⁰ Benis, 32.
¹¹ 度会好一『ユダヤ人とイギリス帝国』岩波書店、二〇〇七年、

であるネイサンに憎悪を向けたが、それは、「当時のイギリス上流社会に属する人々の典型的な例」¹²とも言われる。やがて、フランス革命以降、プロテスタント信仰の広がりとともに、ユダヤ人に対し、キリスト教への改宗を迫りつつ、同時にユダヤ人のパレスチナ復帰を目指す千年王国論がもてはやされるようになる。しかし、改宗運動の圧力下において、「フレンド派（クエーカー派）やユニテリアン派は、一八世紀から一貫してユダヤ人の政治的平等の実現に熱心な応援団であった」¹³ 同時に、ユダヤ人たちは、イギリス国民としての地位を向上させていく。また、十九世紀の「一般的な傾向として、キリスト教への改宗者は少なかった。この事実の裏面には、ユダヤ教信仰の形骸化、世俗化というもう一つの事実が張りついていた」¹⁴。ユダヤ人のアイデンティティは、ユダヤ人というよりはむしろ、イギリス国民であるという意識のほうが強

かった。ユダヤ人の歌手として認識されていたブラハムは、『ヘブライのうた』の制作を支えてはいたものの、子どもたちを英国国教徒として育てている。イギリスという国家の中で、子どもたちをより生きやすくさせるための手段だったのではないかと考えられる。一方、キリスト教徒のイギリス人たちは、パレスチナ植民論を熱く議論していた。特有の民族であるユダヤ人は、完全にイギリスにおいて同化できない異質な集団であり、彼らをパレスチナへ復帰させようという目論見が見え隠れしていたのである。¹⁵ これらの時流を踏まえると、バイロンのユダヤに対する曖昧な態度は、至極一般的なものであったと言える。世間並みの反ユダヤ感情もありつつ、国家を持たない彼らに対する同情もあった。「バイロンのユダヤ人の苦境に対する同情とは、ギリシアやアイルランド、アルメニアの人々に対するものと同質のもの」¹⁶ と考

¹² Lloyd-Jones, Ralph. "Byron and the Jews: The Jewish Byron?" *Byron's Religions*, ed. Peter Cochran, Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, 2011, 233.

¹³ 度会 六十五。

¹⁴ 同、九十四—九十五。
¹⁵ 同、六十六。
¹⁶ Lloyd-Jones, 241.

えられている。バイロンがパレスチナ植民を支持していたかどうかは別にして、パレスチナ復帰論を支持するキリスト教徒のイギリス人が抱く、ユダヤの人々に対する同情心が、バイロンにも見られたということになる。バイロンの場合、ユダヤ人に対する優越的な立場による嘲りの念は多少なりともあったにしろ、それが民族主義における差別というところまでにはまったく至っていない。ただ、周囲の友人たちの反ユダヤ的な態度を考慮すると、彼のネイサンらに対する態度は、ずっと柔軟だったと言える。

このようなバイロンが書いた『ヘブライのうた』の詩は、結局、厳密なユダヤ思想を反映するものではない。バイロンにとって、『ヘブライ』ということばは、神学上もしくは教義上のことばであり、芸術的協同作業という考えに結びつけられる個人の人格を消すという意図があった。¹⁷ つまり、『ヘブライ』ということばには、『うた』をうたう人間を不特定化する働きがある。

17 Heinzelman, Kurt. "Politics, Memory, and the Lyric: Collaboration as Style in Byron's "Hebrew Melodies"." *Studies in Romanticism*, vol.27, no.4, The Johns Hopkins

『ヘブライのうた』がイスラエルの伝説や物語に取材し、ユダヤ音楽をもとにして作曲された旋律が付されたことを、ムアは「バイロンのものではない」と述べたそうだが、そういう意味で、『自我の詩人』という自己主張の強いバイロン作品のなかでも異色の作品であると言える。

『ヘブライのうた』が出版された当初、十二の評論誌に批評が掲載され、批判的なものが大勢を占めた。すべての評論がバイロンによる宗教詩を問題にし、批判の大半は、真に宗教詩と呼ばれるものが少ないことを問題としていた。¹⁸ たしかに、『ヘブライのうた』に収められている作品すべてが、ユダヤの文化・思想を踏襲するものではない。批判的な批評は、バイロンが宗教詩を書くのにふさわしくないというものである。だが、バイロンの宗教上の懷疑主義的な面を指摘されたにしろ、逆にユダヤ文化の因習的な表現を指摘されたにしろ、明らかにユダヤに由来する題材と考え

University Press, Winter 1988, 525.
18 東中 一一六。

られるものをバイロンが描いたという事実、大方のユダヤ人は誇りを持った。それゆえに、『ヘブライのうた』は、ユダヤ人たちに、もつとも頻繁に翻訳されてきた作品である。¹⁹ やがて、ネイサンを含め、『ヘブライのうた』の翻訳に取り組んだユダヤ人たちは、この書物を通じて、ユダヤ人としてのアイデンティティを強固なものとし、バイロンの作品のなかに自分たちの文化や思想の反映を見出していった。そういう意味では、『民族のうた』の潮流に『ヘブライのうた』を位置づけることは可能だろう。

ただし、『ヘブライのうた』に収められている作品群が、バイロンの曖昧な態度に基づくものとすれば、それを『民族のうた』の範疇に、まったく収めてしまうことは難しい。たとえば、ユダヤの『離散』を主題に据えたものは、ユダヤ人に限らず、人間が故郷を離れて安住の地を失っている状況における、根源的な心情を歌っている。ここに、『民族のうた』のくくりを超えた本作品の普遍性がある。

¹⁹ Spector, Sheila A. *Byron and the Jews*. Detroit: Wayne State

古代イスラエルの物語と『ヘブライのうた』

ここでは、『ヘブライのうた』に登場する古代イスラエルの人々と歴史について、旧約聖書の内容をもとにまとめる。

旧約聖書の物語のうち、バイロンが『ヘブライのうた』の作品のために取材した物語は、ヨーロッパ圏では人口に膾炙しているものが多い。『ヘブライのうた』の作品のうち、古代イスラエルの歴史や聖書の物語と関連明らかな関連が認められるものは、図2に示した十五作品（「おまえは生涯を終え」を含める（小川、一九七五）あり、それ以外に、語り手に離散のユダヤ人を据える作品（「野のかもしか」「ああ、泣いてくれ」「私の信仰が偽りなら」「バビロンの水辺に座って」「流れのほとりで」）を含めると、全部で二十作品となる。

① エフタの娘
まず、士師について説明する。エジプトで奴隷の身

University Press, 2010, 6-7.

図2 「ヘブライのうた」にかかわる、古代イスラエルと聖書の関連年表

西暦年	できごと		『ヘブライのうた』関連人物(年)	『ヘブライのうた』による関連作品
	イスラエル、バבלスナ	その他の周辺地域		
1200-1000頃	士師の時代		エフタ	「エフタの族」
1030	王国の創設。サウル王即位。		サムエル、サウル	「我が心は暗い」「サウル」「最後の戦いのまえの、サウルの歌」
1004頃	ダビデ王即位。		ダビデ	「歌う大王が聖書を奏でたのだ!」、「おまえは生涯を終え」
	ダビデ王、エルサレムを首都に定める。			
971頃	ソロモン王即位。		ソロモン	「すべてはむなしい」と伝説者は言う」
950頃	ソロモン王の神殿建築。			
930頃	北王国イスラエルと南王国ユダに分裂。			
850頃	北王国イスラエルで、預言者エリヤが活躍する。			
722	アッシリア帝国に敗れ、北王国イスラエル滅亡。			「ヨルダン川」の周辺では」
700頃	南王国ユダのヒゼキヤ、巴比倫朝アッシリア王セナナケリブに使臣入りする。		セナナケリブ	「セナナケリブの魂滅」
625		新バビロニアの建国。		
612		新バビロニア王國によりアッシリア帝国滅亡。		
597	新バビロニア王國によるエルサレム包圍（第1次バビロン捕囚）。			「野のかもしか」「ああ、泣いてくれ」「バビロンの水辺に
587	新バビロニア王國によりエルサレム陥落。ユダ王バビロンにアシメネシュ（第2次バビロン捕囚）。			眠って」「流れのほとりて」
586	南王国ユダ滅亡。			
550頃		メディア王国滅亡。アケメネス朝ペルシア建国。		
540頃		捕囚民のひとりダニエルがバビロニアで活躍。	ダニエル、ペルシヤザル	「ペルシヤザルの幼親」「ペルシヤザルへ」
539	新バビロニア、アケメネス朝ペルシアに敗れ滅亡。			
515	エルサレム神殿の再建（第二神殿）。			
400頃	露蒙ヨブが神に試される。		ヨブ、エリファス	「ヨブ記より」
312		セレウコス朝シリヤ成立。		
200頃	ユダヤがセレウコス朝シリヤの支配下に入る。			
167	シリヤがエルサレムを略奪、ユダ王族を捕虜。			
164	シリヤからエルサレムを奪還、神殿を再興する。			
142	ハスモン朝が成立、ユダ王独立。			
63	ローマがエルサレムを占領。ユダヤはローマの属州シリヤに併合される。			
48	ヘロデ、ガリヤヤ知事に任命される。		ヘロデ	
40	ヘロデ、ユダヤ王に任命される。		ヘロデ	
37	ヘロデ、エルサレムを征服。		ヘロデ	
30頃	ヘロデ、マリヤムネを妻とするが、その後処刑。		ヘロデ	「マリヤムネを情むヘロデの歌き」
20	ヘロデ、エルサレム神殿を改修。		ヘロデ	
6頃	イエス誕生。			
4	ヘロデ、死去。		ヘロデ	
6	ユダヤ、ローマの属州となる。			
30	イエス刑死。		イエス	「マグダラのマリヤ」
66	ローマに対するユダヤ人の反乱（第1次ユダヤ戦争）。			
70	ローマ軍がエルサレムを占領（第1次ユダヤ戦争終結）。ユダヤ人は二世紀後まで。			
132	ローマに対するユダヤ人の反乱（第2次ユダヤ戦争）。			「ティトゥスがエルサレムを破壊した日に」
135	エルサレム陥落（第2次ユダヤ戦争終結）。ユダヤ人は二世紀後まで。バビロン捕囚の再興。			「私の信仰が偽りなら」

分に置かれていたイスラエル（ヘブライ）人たちは、指導者モーセとともに、エジプトを脱出した。彼らはやがてカナンに定住する。カナンには、様々な諸民族が定住し、都市国家を築いていた。人々はバール神など、現世において利益をもたらす豊穡の神々を崇拝していた。イスラエル人の生活にも、その影響は大きかった。神は、そのようなイスラエルの人々に対して外敵を送り、侵略させる。苦境に陥った人々は、悔い改めて神に助けを求め、士師を遣わしたのだった。

つまり、士師とは、英雄的な政治的指導者のことを指す。もとは神に選ばれた裁判官の役割を担っていたが、同時に軍事的にも活躍し、外敵の侵略に立ち向かうのに、重要な存在だったのだ。その後、イスラエル諸部族が国家として統一されるまでの間に出現した、合計十二名の指導者たちを士師と呼ぶ。エフタはその一人だった。

エフタは、アンモン人との戦いでの勝利を願い、もし勝利を得られるのであれば、家に帰ったときに、最初に扉から出て来たものを、神に捧げると、神に誓約を立てた。その結果、戦いでは勝利した。その後、帰

宅すると、最初に迎えに出て来たのは、大切な娘だった。後悔しつつもエフタは誓約を守り、供犠として娘を神に捧げた。

②サムエル、サウル、ダビデ

預言者でもある士師サムエルは、神の啓示を受け、イスラエル全土で活躍した。強敵ペリシテ人との戦乱も、サムエルの祈りによって、ひととき平和が訪れた。

サムエルが年老いると、自分の息子たちを士師としたが、息子たちは邪よこしまだったので、不満を抱いたイスラエルの長老たちは、サムエルのもとに来て、他の国々と同じように、王を立てるよう要求した。士師を指導者とする部族連合的な社会ではなく、王のいる統一国家を願ったのだ。結局、神がサムエルに、人々の声にに応じて王を立てるように告げたため、サムエルは王になる人物を探すことになった。

サムエルは、神の啓示によって、王となるベンヤミン族出身の若者が、ラマという町に来ると知り、ラマで彼を見つけると、食事に誘った。一方、若者は、家の迷子になったロバを探しに出かけたものの、見つ

らなかったで、預言者がいるというラマの町にやってきて、ロバの行方を神に聞いてみようと思っていた。ラマに着くと、若者は預言者サムエルを訪ねたところ、食事に誘われた、という次第である。若者の名を、サウルと言った。

サムエルは、サウルの頭に油を注いで聖別した。「油を注ぐ」という行為は、神がその人を王に任命したことを意味する。その後、人々のところに戻ったサムエルは、人々とともに、サウルを王として選んだ。サウルは、イスラエルの最初の王となった。

サウルは、息子ヨナタンとともに、イスラエルの兵士たちを率いて、周辺の民族との戦いにのぞみ、次々と勝利を収めていった。しかし、アマレク人との戦いの最中、サウルが「アマレク人とその所有物をすべて滅ぼせ」という神のことに背いたため、サムエルは神がサウルから離れることを告げ、彼もサウルのもとを去った。

サムエルは再び、王にふさわしい別の人物を探しに出たところ、ベツレヘムで羊の番をしていた美しい少年を見つけた。神がその少年を聖別するように求めた

ため、サムエルは彼に油を注いだ。少年の名を、ダビデと言った。

その後、神はサウルから離れ、ダビデに降りるようになったので、サウルは悪霊に苛まれることになる。いわゆる、ノイローゼの状態だったと考えられる。

サウルの家臣たちは、サウルの苦しみを和らげようと、堅琴の演奏を聴くことを進言、名演奏家として連れて来られたのは、他でもない、ダビデだった。ダビデはサウルに仕えるようになる。

その後、サウル率いるイスラエルと、ペリシテ人との戦いの中で、ダビデは敵の勇者で巨人のゴリアトと一騎打ちにのぞみ、見事にゴリアトを打ち負かす。そして、ペリシテ人は潰走。ゴリアトに勝利したことで、ダビデの名前も有名になった。人々の人気がダビデに集まるようになると、サウルは彼に嫉妬し、敵意を抱くようになる。ダビデは身の危険を感じ、友情で結ばれた、サウルの息子ヨナタンの手を借り、脱出に成功する。ダビデはその後、各地を放浪し、ヨナタンは父親と友人との間で苦しむことになる。

一方、サウルは霊媒師のもとを訪れ、すでに亡くなっ

たサムエルの霊を呼び出し、ペリシテ人とどう戦えばいいのかを尋ねるが、サムエルはサウルの敗北を告げたのだった。

ペリシテ人との戦いで、ヨナタンを含むサウルの息子たちは、ギルボア山で殺害され、サウルも追い詰められて自殺した。この知らせを受けたダビデは、彼らの死を悼み、喪に服した。

③ ソロモン

王となったダビデは、国を統一した。その後、アンモン人との戦いの最中、ダビデが王宮にとどまっていた時、彼は美しい女性バト・シェバを見初め、彼女が部下の妻であると知りながら、寢床をともししてしまう。彼女の妊娠が分かると、ダビデはバト・シェバの夫を戦争の最前線に送り込み、彼を戦死させた。そして彼女を王宮に引き取って妻とし、子を出産させた。しかし、神がダビデの殺人と姦淫の罪を咎め、生まれた子どもは七日目に病気にかかり、亡くなった。やがてバト・シェバは再び身ごもり、男の子が生まれた。その子は、ソロモンと名付けられた。

やがてソロモンは油を注がれて王となり、神のご加護により、知恵と富と栄光を手にした。

④ 預言者エリヤとバール神信者たち

各地で反乱が起き、王国が揺らぎ始める中、ソロモン王が亡くなると、統一王国は、北王国イスラエルと南王国ユダに分裂する。両国は常に政情が安定せず、動乱の時代に突入する。

預言者エリヤが活躍したのは、北王国の王がアハブだった頃のこと。アハブの妻イゼベルはフェニキアの王女で、バール神の信者だった。アハブは彼女の影響で、バール神を祀る神殿を建て、祭壇を築き、彼自身もまたバール神を信仰した。イゼベルはまた、イスラエルの預言者たちを弾圧した。北王国では三年間旱魃が続き、都は飢饉に見舞われた。

エリヤはアハブのいる王宮に出向き、イスラエルのすべての民と、バールの預言者四五〇人、別の異教の神の預言者四〇〇人を、カルメル山に集めるよう、アハブ王に求めた。カルメル山に異教の預言者たちが集まると、祈りで対決することになった。雄牛を割いて

神への捧げものとし、薪の上にのせて、神への祈りで点火させて燃え上がらせようという対決である。パールの預言者たちがパール神へ呼びかけ、祈り続けたが、甲斐なかった。エリヤが雄牛を神への祭壇に置き、祈ると、天から火が降り注ぎ、雄牛が焼かれた。民はひれ伏し、ユダヤの神をあがめた。やがて大雨が降り、旱魃は終わった。

かつてモーセは、紀元前一三〇〇年頃、エジプトを脱出した後、シナイ山で、神から十戒を授かったが、その時も、神は雷鳴をとどろかせ、閃光を走らせ、顕現したのだった。

⑤南王国のヒゼキヤと大国アッシリアのセンナケリブ
紀元前七二二年、北王国イスラエルは、強大なアッシリアによって滅ぼされた。一方、南王国ユダも、その攻勢に苦しめられた。

預言者イザヤの活躍した頃、アッシリアを前に、南王国もその影響下に入らざるを得なかった。王アハズはイザヤの忠告を無視し、アッシリアと臣従関係を結んだ。しかし、アハズの子ヒゼキヤが王位を継承する

と、アッシリア王センナケリブは、南王国へ侵攻した。ヒゼキヤは、神を深く信仰していたので、神に祈り、またイザヤにも助言と祈りを求めた。すると、神の使い（天使）が現れ、アッシリアの大軍を壊滅させた。センナケリブは退却を余儀なくされ、その後、自国の都に戻るも、息子たちの反乱に遭い、殺害された。

⑥ベルシャザルとダニエル

預言者ダニエルは、紀元前六〇〇年頃、新バビロニア王国とアケメネス朝ペルシアで活躍した。まずは、ダニエルが新バビロニアで活躍するまでの、南王国ユダの滅亡から、簡単に見てみよう。

紀元前六〇五年以降、南王国ユダは、新バビロニアに臣従していた。しかし、エジプトの影響力を増すと、エジプトへ接近した。その接近を快く思わなかった新バビロニアは、紀元前五九七年、南王国へと侵攻、エルサレムを包囲し、占領した。町を破壊しなかったものの、およそ一万人を新バビロニアの都バビロンへと強制連行した（第一次バビロン捕囚）。

その後、南王国は再び、エジプトと結託して新バビ

ロニアへの攻撃を画策した。ところが、その企てが新バビロニアに知られるところとなり、再度新バビロニアが侵攻、エルサレムは二年間の戦乱の後、紀元前五八六年、ついに陥落した。この時、町全体は破壊され、神殿にも火がかけられた。その後、多くの人々がバビロンへと連行された(第二次バビロン捕囚)。エルサレムはもぬけの殻となった。

バビロンへ連れ去られた人々は、比較的自由で恵まれた生活が認められていた。しかし、かつての南王国ユダの人々は、信仰とアイデンティティを深め、「ユダヤ人」として自己認識するようになった。

さて、そのバビロン捕囚の際、バビロンへ連れて来られた人々の中から、新バビロニアに高官として仕えるよう、ネブカドネザル二世によって、優秀な若者が選ばれた。そのうちのひとりが、ダニエルだった。ダニエルは、ネブカドネザル二世から新バビロニアの最後の王ベルシャザルの治世まで新バビロニアで活躍し、その後ペルシアへと活動拠点を移す。

ベルシャザル王は墮落した王だった。あるとき、千人を招いた酒宴の席で、彼の没落という運命を示す文

字が壁に現れた。この文字の意味を、ダニエルが読み取り、王が死ぬ運命をまぬかれず、新バビロニアが滅亡すると告げたのだった。

ダニエルの予言通り、新バビロニアがアケメネス朝ペルシアによって滅亡した後、ダニエルはペルシアへと渡り、一方、捕囚の人々は半世紀以上の時を経て、エルサレムへと帰還したが、その半世紀の間に、エルサレムにはサマリア人を含めたほかの民族の人々が居住していた。彼らとの摩擦もあり、ユダヤの神を祀る神殿の再建はスムーズには進まなかったが、なんとか紀元前五一五年に、「第二神殿」として完成した。

⑦ヘロデとマリヤムネ

「第二神殿」完成後、約四〇〇年の歳月が流れると、エルサレムとその周辺地域は、ユダヤは独立し、ハスモン家による支配に入る。しかし、隣接する強国の、シリアやローマによって、翻弄され続け、紀元前三十三年には、ローマがエルサレムを占領、ユダヤはローマの属州シリアに編入される。その中で有力な政治家となったのが、ヘロデ大王である。ヘロデは、ユ

ダヤ人ではなく、イドマヤ人だったが、情勢を見抜き、うまく立ち回り、また、ローマとの強固な関係を築き、ユダヤの王の地位にのぼりつめた。また、ハスモン家の血を引くマリآمネと婚姻関係を結ぶなど、ユダヤの王としての裏付けも怠らなかった。

マリآمネとの結婚は、政略結婚ではあるものの、ヘロデは彼女を深く愛したと伝えられている。彼女との結婚のために、最初の妻を手放しさえした。しかし、二人をとりまく権力闘争は凄まじく、家族内でも憎みあうようになる。マリآمネは誇り高き女性でもあった。ヘロデの母や妹たちは、やがてそのようなマリآمネに敵意を抱き、ヘロデにマリآمネとその叔父との不義を疑わせるよう仕向けた。ヘロデは、結局、マリآمネの処刑を命じたのだった。のちに彼女の殺害を悔やみ、ヘロデは一時狂気に陥った。その後も、ヘロデはハスモン家の人々の粛清を続け、マリآمネとの間に生まれた息子たちをも殺害した。

⑧ 流浪するユダヤ人たち

ヘロデの死後、ローマはエルサレムの直接支配に乗

り出した。紀元後一世紀中葉には、ローマの圧政に対するユダヤの人々の抵抗も激しくなった。洗礼者ヨハネの洗礼運動や、ナザレのイエスによる活動は、このような状況下、人々から大いに支持されたのだ。ついに、紀元後六十六年、ユダヤとローマは本格的な軍事衝突をし、七〇年には、ローマ皇帝ティトゥスがエルサレムを陥落させた。このとき、エルサレムの第二神殿は焼失し、ユダヤは国家としての独立を喪失した。

その六〇年後の紀元後一三五年、二度目のユダヤによる大規模反乱は、結果的にローマによって完全に鎮圧された。ユダヤの人々は、エルサレムとユダ地方から追放され、その多くがバビロニアへと移った。

『ヘブライのうた』のバイロニック・ヒーロー

これまで述べてきた古代イスラエルの物語に取材し、バイロンは『ヘブライのうた』において、彼独自の英雄像、いわゆる〈バイロニック・ヒーロー〉を造形している。バイロニック・ヒーローとは、詩人バイロンが、自分の造形する登場人物たちに、自己の投影をしたことによって、読み手が登場人物を想像すると

きに、詩人バイロン自身を考えずにはいられないような、男性の登場人物たちを指す。「謎めいた過去を持ち、時に悪徳に手を染めることもありつつも高潔さを失わない人物像、キリスト教的道徳、啓蒙主義的理性、機械論的知性など、自身の自我以外のあらゆる権威を認めず、自身の自我を外部から抑圧するものには傲岸不遜の反抗的な態度を以てする人物像、また、自分自身に対しても高度に批評的、内省的な意識を常に保持している、極めて気位の高い人物像の謂いである。」²⁰ この特徴は、『ヘブライのうた』に描かれる男性登場人物たちにも、認めることができる。サウルやソロモン、ヘロデは、バイロニック・ヒーローの典型例だ。さて、これらの古代イスラエルの物語に由来するバイロニック・ヒーローたちは、なぜ『ヘブライのうた』の各作品で描かれることになったのだろうか。

聖書の記述に対して、バイロンを取り囲むロマン派

20 菊池有希『近代日本におけるバイロン熱』勉誠出版、二〇一五年、九頁。

21 松島正一『イギリス・ロマン主義事典』北星堂書店、一九九五年、三三二頁。

の詩人たちの間では、「聖書の言語が普遍的で、新しきエルサレム（人類の歴史の模範の詩的意図）の感情を表現するのに用いることができる」という気持ちがあった。²¹ 彼らは新古典主義における古代ギリシア・ローマの美的様式と対等な価値を、聖書に見出していた。つまり、聖書の内容を歴史的価値のあるものとしたのだ。バイロンに限って言えば、古代ギリシア・ローマに対する理解も深く、ロマン派の対立軸に置かれる一八世紀古典派の詩も大変好んでいたため、どちらも重要な古典であり、詩作の源泉とも思っていたであろう。一七五三年に刊行されたロバート・ロウスの『ヘブライの聖なる詩に関する講義』²² では、ギリシア・ローマの詩と比較する形で、ヘブライの詩が読み解かれている。

バイロンは、ユダヤ教徒ではないし、そのような家系に生まれたわけでもない。しかし、古代イスラエル

22 Lowth, Robert. *Lectures on the sacred poetry of the Hebrews*. Boston: Crocker & Brewster, 1829.
<https://archive.org/details/lecturesonsacred00lowthrich>

の王たちの物語にとっても興味を持っていた。それは、古代ギリシア・ローマの古典文学に対する造詣の深さに由来するものであり、貴族としての家柄から身に着けてきた教養でもあろう。後に執筆することになる劇詩『カイン』は、旧約聖書の創世記の有名な殺人物語に取材しつつ、神に反逆を企てた〈英雄的〉ルシファアが重要人物とされている作品だ。また、『サルダナパロス』はアッシリアの崩壊を招く伝説上の王である。古代の中東地域の歴史物語に取材する、バイロニック・ヒーローと性格や特徴が合致する人物たちを、好んで作品に取り入れ、彼らの反逆的で退廃的な様子を、バイロンは描いた。『ヘブライのうた』は、それらの先駆け的作品を含めた作品集であると言えるだろう。

23 今回の調査で確認したものは以下の書物である。『バイロン』もしくは「ヘブライ」の文字が書籍の表題か副題、または章名に含まれ、表題に別個の作品名を冠していない詩集を調査対象とした。調査した書物には、いずれも、ネイサンによる楽譜はついていない。同一作品の同一訳であったも、一部を除き、版によって収録されている事柄が異なるものは別の書物として数えた。したがって、松山敏の訳は二種、阿部知二の訳は四種、小川和夫の訳は三種、別個のものとして数えた。以下に、翻訳され収録されている作品数（末尾の括弧に入れ

日本における『ヘブライのうた』の翻訳

いわゆる〈バイロン詩集〉を名乗る書物は数多くある。しかし、「美をまとい、その女は歩む」を含め、『ヘブライのうた』に収められている作品は、そういった〈バイロン詩集〉のなかで、独立した〈ヘブライのうた〉という章立てがなされることは、比較的少なく、そのほとんどは、まったく別な章立てのなかに、バラバラにされて収められている。つまり、刊行されている〈バイロン詩集〉のほとんどが、別の表題でおおまかなくくりを設け、『ヘブライのうた』の中からいくつかの作品を訳者・編者が選んで訳出掲載しているのだ。

今回、私が邦訳三十点²³を調査し、確認した限りでは、『ヘブライのうた』に収められている作品数を

たアラビア数字）とあわせて示す。

- ① 児玉花外『バイロン詩集 短編』大学館、一九〇七年。（6）
- ② 木村鷹太郎『バイロン傑作集』後藤商店出版部、一九一八年。（0）
- ③ 正富汪洋『バイロンシエリイ二詩人詩集』目黒書店、一九二一年。（1）
- ④ 牛山充『バイロン詩集』越山堂、一九二三年。（0）
- ⑤ 石羅信夫『バイロン詩集』崇文館書店、一九二三年。ただし、巧人社（一九三五）版も、内容は同一。（0）

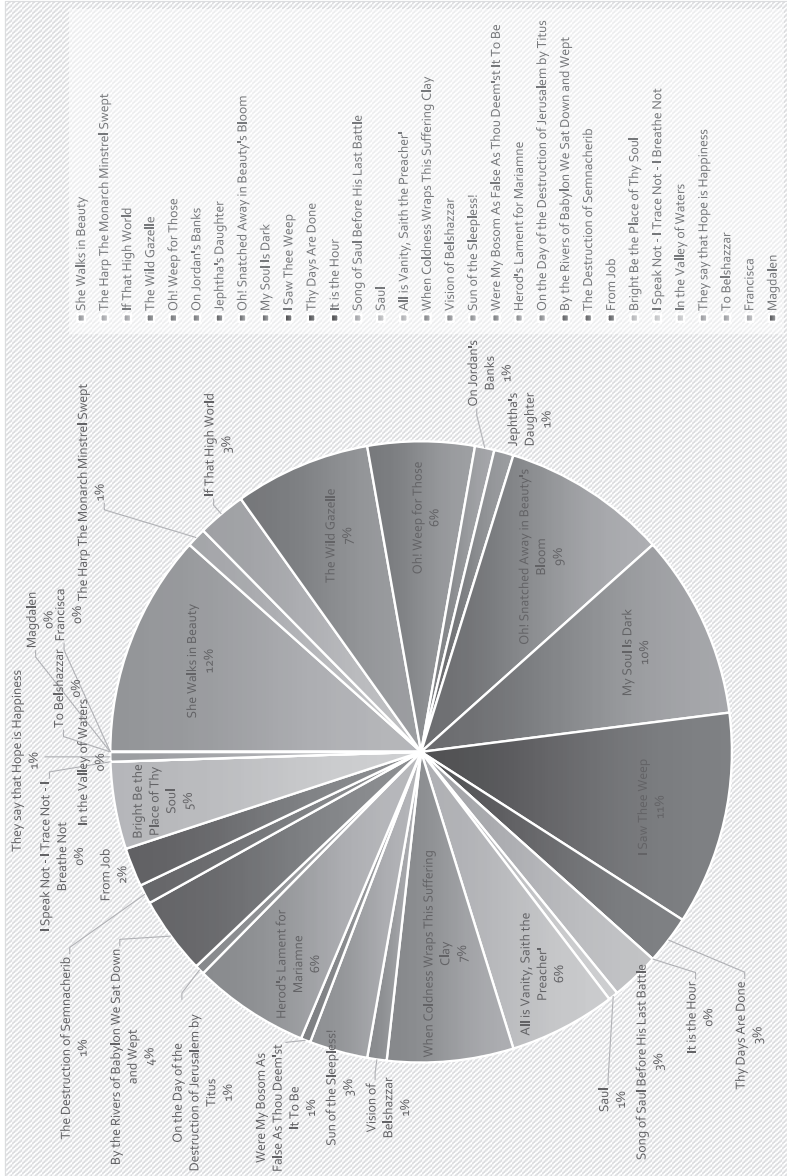
三十一とすると、燕石猷による訳の二十三作品が最大であり、次に斎藤正二による訳の十八作品、小川和夫による訳（角川書店版）の十六作品が続き、完訳は、現時点では確認できなかった。

- ⑥ 松山敏『バイロン名詩小曲集』緑蔭社、一九二六年。（4）
- ⑦ 松山敏『バイロン名詩選集』聚英閣、一九二六年。（4）
- ⑧ 矢口達『十大詩聖詩集と其人々』教文社、一九二七年。（0）
- ⑨ 幡谷正雄『バイロン詩集』新潮社、一九三三年。なお、幡谷正雄による同じ訳は、川野達夫編『イギリス詩集』（人生社、一九五三年）にも「私はお前の泣くのを見た」のみ収録されている。（5）
- ⑩ 熊田精華（ほか共訳）『バイロン全集』第四巻、日本図書センター（那須書房）、一九九五年復刻（一九三六年）。（6）
- ⑪ 片山彰彦『バイロン詩集』京文社書店、一九三九年。（7）
- ⑫ 宮本正都『バイロン詩集 別離の戀』文章社、一九四二年。（8）
- ⑬ 阿部知二（日夏耿之介監修、共訳）『バイロン詩集』第二巻、三笠書房、一九五〇年。該当する作品は「抒情詩」の章に収録。（2）
- ⑭ 燕石猷（日夏耿之介監修、共訳）『バイロン詩集』第二巻、三笠書房、一九五〇年。該当する作品は「希伯來振り」の章に収録。（23）
- ⑮ 上野忍『バイロン 愛の詩集』見文社、一九五〇年。（5）
- ⑯ 阿部知二『バイロン詩集』新潮社、一九五一年。（8）
- ⑰ 林典雄『バイロン詩集』新詩社、一九五一年。（7）
- ⑱ 阿部瓊夫『バイロン詩集』創人社、一九五二年。また、金園

しかも、作品によって、翻訳数にかなりの偏りが見られる（図3参照）。

- 社（一九七五年）から出版されたものも、内容は同一。（8）
- ⑲ 日夏耿之介『イギリス抒情詩集』河出書房、一九五二年。（0）
- ⑳ 小川和夫（加納秀夫ほか共訳）『世界名詩集大成9 イギリス篇I』平凡社、一九五九年。（15）
- ㉑ 阿部知二『バイロン詩集』弥生書房、一九六三年。（8）
- ㉒ 三浦逸雄『バイロン新詩集』日本文芸社、一九六六年。（8）
- ㉓ 斎藤正二『バイロン詩集』角川書店、一九六七年。ただし、「音楽に寄せて」のみ、「ヘブライ調」とは別の章に収録。（18）
- ㉔ 阿部知二『バイロン詩集』新潮社、一九六八年。なお、小沢書店（一九六六年）から出版されたものも、内容は同一。（6）
- ㉕ 吉田新一『バイロン珠玉詩集』三笠書房、一九六九年。（7）
- ㉖ 宮崎孝一『バイロン詩集』旺文社、一九六九年。（5）
- ㉗ 小川和夫『バイロン詩集』角川書店、一九六九年。ただし、「曲を附するための作詞（君の魂の安らうところ）」のみ、「ヘブライ調」より」の章とは別の章に収録。（16）
- ㉘ 小川和夫『バイロン詩集』白鳳社、一九七五／一九九八年。ただし、「曲を附するための作詞」のみ、「ヘブライ調」とは別の章に収録。（14）
- ㉙ 加納秀夫（安藤一郎ほか編共訳）『世界文学全集103 世界詩集』講談社、一九八一年。（6）
- ㉚ 笠原順路『対訳バイロン詩集』岩波書店、二〇〇九年。

図3 バイロン『ヘブライのうた』邦訳作品数割合



東中稜代は、その論文のなかで、『ヘブライのうた』の作品を、三つのテーマ、つまり「魂の行方」、「政治」、「愛」に分類する。さらに、「全体を読んでみると、ユダヤの歴史や聖書に全く関係のないものが三分の一近く」あり、愛の詩も多いと指摘する。²⁴ 日本語による翻訳で、最も取り上げられているのは、「美をまとい、その女ひとは歩む」、「わたしはおまえが泣くのを見たよ」、「ああ、花のさかりに死んだひとよ」といった作品だろうが、これらは、参照した〈バイロン詩集〉のなかでも数多く取り上げられているところを見ると、東中による分類のうち、「愛」のテーマに属するものが、日本では人気があると言えよう。

逆に、ほとんど訳が確認できなかった作品は、「サウル」や「私の信仰が偽りなら」、「ティトウスがエルサレムを破壊した日に」など、主に聖書やユダヤの歴史の知識が前提とされている作品だ。日本ではなかなかなじみのない主題だけに、敬遠されてきたことは想像に難くない。

24 東中、一一九頁。

また、同じ〈離散したユダヤの人々の悲嘆〉を主題に据えた作品であっても、翻訳の数にちがいがいることは興味深い。「野のかもしか」、「ああ、泣いてくれ」、「バビロンの水辺に座って」の三作品は、比較的翻訳が試みられてきたが、これらの共通事項は、いずれも、土地を追われて離散し、さまようユダヤ人が、破壊されて帰還が困難となった故郷をいとおしむ〈なげきの歌〉であり、神への呼びかけが見られないことだ。土地を示す固有名詞を除けば、内容を理解する上で必要な知識は問われない。

一方、「ヨルダン川の岸辺では」、「私の信仰が偽りなら」、「ティトウスがエルサレムを破壊した日に」の三点は、主題は〈離散したユダヤの人々の悲嘆〉だが、いずれも、神に対する強い結び付きを示す事柄が語られる。そのためか、翻訳を目にすることは比較的少ない。「ヨルダン川の岸辺では」では、ユダヤの神と対立するバール神に祈りを捧げる異教徒の様子、彼らによる流聖、ユダヤの神による業と神への呼びかけが見

られる。「私の信仰が偽りなら」では、自分の信仰する神の思し召し（神が離れてしまったこと）によって、自らの土地を手放すことになった人物が語り手であり、神と（二人称で表現される）敵と（一人称の自分との関係が述べられる。ユダヤ教の考え方を知っていないと、なかなか読み取りに苦労する。「ティトゥスがエルサレムを破壊した日に」では、紀元七十年にエルサレムで起きたローマ人による神殿と町の破壊という歴史的事項に基づき、神への呼びかけが示される。ところで、これまでの日本におけるユダヤの人々、もしくは彼らの文化や習慣に対する理解はどのようなものだったのだろうか。端的に言うところ、歴史的に、そのような理解はほぼ皆無に近い。ユダヤの人々の携わる経済に関わる視点のみにとどまり、それぞれの時代における政治的・経済的状况において、彼らに対する態度の寛容性の度合いが変化する。そこに一貫性は見られない。

また、旧約聖書に収められている数々の歴史的物語に対しては、西欧諸国との思想的交流においては、主にキリスト教（とくにカトリック）に基づいて行われ

ているため、あくまでもキリスト教的な理解にとどまり、ユダヤ的な旧約聖書の理解には至っていない。

また、『ヘブライのうた』の邦訳を掲載している書籍にはどれも、ネイサンによる楽譜が添えられていない。読者は、バイロンが『ヘブライのうた』に描いた古代ユダヤの世界観を、それぞれ日本語になった作品から読み取る必要がある。バイロンによる作品が、直接旧約聖書と関係がないものでも、ネイサンによる音楽があれば、それを『ヘブライのうた』として認識することも可能であろう。しかし、付された音楽を剥離してしまうと、単純に『ヘブライ』とは言えない、曖昧な態度のバイロンの詩だけが残ってしまう。

日本における翻訳は、詩そのものの主題がたしかに『ヘブライ』とは言えないことを確認したうえで、作品を吟味し、作業を行うことになる。『ユダヤ』に対する理解が希薄な風土において、これら邦訳で扱われる作品は限定的で、旧約聖書との関連の希薄なものを選ばれる。思想・宗教の前提が異なると、取り上げられる作品が変わるのはやむを得ないところもあっただろう。

日本では、明治以降、訳者・編者によって、『ヘブライのうた』に収められている詩は、解体、選別され、訳者・編者の〈バイロン像〉に合致した作品だけが、『バイロン詩集』と銘打つ書物に掲載されてきた。本来であれば、『ヘブライのうた』として、一冊の集合体として理解されるべきものが、そうなされてはこなかったのである。極東の島国では、音楽を附したネイサンの、出版の意図からは遠く離れて、まったく別な理解が成り立っていたと言っている。バイロンの没後二百年を前に、『ヘブライのうた』全体が表現する普遍性を、改めて考え直す必要があるだろう。

文献一覧

【底本】

Byron, George Gordon. *The Complete Poetical Works*. Vol.3. ed. Jerome J. McGann. Oxford: Clarendon Press, 1981.

【参考文献】

〔英語資料〕

〈作品〉

Ashton, Thomas. *Byron's Hebrew Melodies*. London: Routledge & Kegan Paul, 1972.

Burwick, Frederick and Douglas, Paul eds. *A Selection of Hebrew Melodies, Ancient and Modern, by Isaac Nathan and Lord Byron*. Tuscaloosa: University of Alabama Press, 1988.

Coleridge, Ernest Hartley, ed. *The Works of Lord Byron*. Poetry. Vol.III. New York: Octagon Books, 1966.

Freyne, Michael, ed. "Hérodé et Marianne," *Les Œuvres Complètes de Voltaire*, 3c. Oxford: Voltaire Foundation, 2004.

Nathan, Isaac. *Fugitive Pieces and Reminiscence of Lord Byron*. London: Whitaker, Treacher and Co., 1829.

〈書簡〉

Marchand, Leslie A., ed. *Byron's Letters and Journals*. Vols.2, 4-5. Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press, 1973, 75-76.

〈研究書〉

Cochran, Peter, ed. *Byron's Religions*. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, 2011. Also including: Ralph Lloyd-Jones, "Byron and the Jews: The Jewish Byron?," 228-242.

Lowth, Robert. *Lectures on the sacred poetry of the Hebrews*. Boston: Crocker & Brewster; New York: J. Leavitt, 1829.
<https://archive.org/details/lecturesonsacred00lowthrich>
Spector, Sheila A. *Byron and the Jews*. Detroit: Wayne State

University Press, 2010.

——『*Romanticism/Judaica: A Convergence of Culture*』Surrey: Ashgate, 2011. Also including: Toby R. Benis, "Byron's Hebrew Melodies and the Musical Nation," 31-44.

〈英文書籍・雑誌等所収論文〉

Mole, Tom. "The handling of Hebrew Melodies." *Byron: Heritage and Legacy*, ed. Cheryl A. Wilson. New York: Palgrave Macmillan, 2008, 101-113.

Heinzelman, Kurt. "Politics, Memory, and the Lyric: Collaboration as Style in Byron's "Hebrew Melodies"." *Studies in Romanticism*, vol.27, no.4, The Johns Hopkins University Press, Winter 1988, 515-527.
<https://www.jstor.org/stable/25600743>

〔日本語資料〕

〈バイロン作品翻訳書〉

阿部瓊夫『バイロン詩集』創人社、一九五二年。

——『バイロン詩集』金園社、一九七五年。

阿部知二『バイロン詩集』新潮社、一九五一年。

——『バイロン詩集』弥生書房、一九六三年。

——『バイロン詩集』新潮社、一九六八年。

——『バイロン詩集』小沢書店、一九六六年。

安藤一郎ほか編共訳『世界文学全集103世界詩集』講談社、

一九八一年。

石躍信夫『バイロン詩集』崇文館書店、一九二三年。

——『バイロン詩集』巧人社、一九三五年。

上野忍『バイロン愛の詩集』晃文社、一九五〇年。

牛山充『バイロン詩集』越山堂、一九二二年。

小川和夫『バイロン詩集』角川書店、一九六九年。

——『バイロン詩集』白鳳社、一九七五年。

——『ドン・ジュアン』上巻、富山房、一九九三年。

笠原順路編訳『対訳バイロン詩集 イギリス詩人選(8)』岩波書店、二〇〇九年。

片山彰彦『バイロン詩集』京文社書店、一九九三年。

加納秀夫ほか共訳『世界名詩集大成9 イギリス篇I』平凡社、一九五九年。

川野達夫編『イギリス詩集』人生社、一九五三年。

木村鷹太郎『バイロン傑作集』後藤商店出版部、一九一八年。

熊田精華(ほか共訳)『バイロン全集』第四巻、日本図書センター(那須書房)、一九九五年復刻(一九三六年)。

兄玉花外『バイロン詩集 短編』大学館、一九〇七年。

斎藤正二編訳『世界の詩集4 バイロン詩集』角川書店、

一九六七年。

幡谷正雄『バイロン詩集』新潮社、一九三三年。

林典雄『バイロン詩集』新詩社、一九五一年。

東中稜代『ドン・ジュアン』上下巻、音羽書房鶴見書店、

二〇二一年。

日夏耿之介監修『バイロン詩集』第二巻、三笠書房、一九五〇年。

——『イギリス抒情詩集』河出書房、一九五二年。

正富汪洋『バイロンシエリイニ詩人詩集』目黒書店、一九二一年。

松山敏『バイロン名詩小曲集』緑蔭社、一九二六年。

バイロン『ヘブライのうた』に関する研究ノート

——『バイロン名詩選集』聚英閣、一九二六年。

三浦逸雄『バイロン新詩集』日本文芸社、一九六六年。

宮崎孝一『バイロン詩集』旺文社、一九六九年。

宮本正都『バイロン詩集 別離の戀』文童社、一九四二年。

矢口達『十大詩聖詩集と其人々』教文社、一九二七年。

吉田新一『バイロン珠玉詩集』三笠書房、一九六九年。

〈単行本（日本語原書）〉

市川裕編『図説ユダヤ教の歴史』河出書房新社、二〇一五年。

菊池有希『近代日本におけるバイロン熱』勉誠出版、二〇一五年。

鈴木範久監修、月本昭男、佐藤研編『聖書と日本人』大明堂、

二〇〇〇年。

松島正一『イギリス・ロマン主義事典』北星堂書店、一九九五年。

水地宗明監修、新プラトン主義協会編『ネオプラトニカ——新

プラトン主義の影響史』昭和堂、一九九八年。

水地宗明ほか編『新プラトン主義を学ぶ人のために』世界思想

社、二〇一四年。

度会好一『ユダヤ人とイギリス帝国』岩波書店、二〇〇七年。

〈単行本（翻訳書）〉

新共同訳『バイブル・プラス聖書』日本聖書協会、二〇〇九年。

ウエルギリウス『牧歌／農耕詩』小川正廣訳、京都大学学術出

版会、二〇〇四年。

スタインバーク『ユダヤ教の考え方 その宗教観と世界観』手島

勲矢監修、山岡万里子訳、ミルトス、一九九八年。

ヨセフス『ユダヤ戦記Ⅰ』新見宏訳、山本書店、一九七五年。

ヨセフス『ユダヤ古代誌XIV—XV』秦剛平訳、山本書店、一九八〇年。

〈雑誌論文〉

東中稜代「バイロンの Hebrew Melodies における 'ambivalence'

について」、『龍谷大学佛教文化研究所紀要』第二十二集、

龍谷大学佛教文化研究所編、一九八三年、一一四—一二八頁。

〈ウェブ資料〉

Cochran, Peter. Hebrew Melodies, *Peter Cochran's Website*.

WordPress.com. 26 Mar. 2006. [https://petercochran.files.](https://petercochran.files.wordpress.com/2009/03/hebrew_melodies.pdf)

[wordpress.com/2009/03/hebrew_melodies.pdf](https://petercochran.files.wordpress.com/2009/03/hebrew_melodies.pdf)